

# 史 談

2009 (H21) 10・25

## ■ 大般若経の虫干し

この八月二日、東横田尻の金澤寺の裏手にある馬鳴堂の中から、「大般若経」六百巻を歴史館のホールに出して虫干しをしました。

この日は朝から田尻地区の有志や寺の役員、史談会会員の手を借り、六つの箱を外に出して虫や糞をはらい、ホールの中に入れてテーブルの上に順番に並べましたが、肝心の六百巻目が行方不明になっていることがわかりました。



また今回、この機会に馬鳴堂の中にある「面付」をデジタルカメラで撮影し、コンピュータに入れて解読を進めたところ、この六百巻のお経が約三十四両一分ほどの寄付によって求められたことなど、いろいろなことがわかってきました。

ここの「面付」は万延の大般若の他に明治十年代の経蔵（馬鳴堂）と馬鳴菩薩のものがありますが、それぞれ傷みも少なく、字もほとんどか読める状態です。このため高岡の観音堂にある「大般若経縁起書」の内容との比較が可能になり、いろいろとおもしろいことがわかってきました。

くわしいことは、つぎに発行される『史談』に発表する予定です。（丸川）

## ■ 会報などの配布の方法について

前回の会報でお知らせ致しましたが、経費の節減を考えて各地区内の会員の方に、この会報とその他の文書の配布をお願いすることになりました。お手数ですがよろしく願いいたします。

## 7 諏訪神社と沼沢伊勢顕彰碑

穴堰を抜けた諏訪堰は、長井市柏林を抜け、白鷹町浅立に入る。浅立にはこの堰の名前の元になった諏訪神社があり、その境内には沼沢伊勢の顕彰碑が建っている。



この石碑は安政二（一八五五）年に建てられたもので、碑銘は四言二〇句の漢詩であり、米沢藩の学者で詩人としても知られた山田夔堂（やまだかくどう）が書いたものであるという。

伊勢という人がどのような経歴の人であるのかよくわかってはいないようである。浅立ちの肝煎の家に生まれ、直江兼続の最上攻めに出陣したという話も伝わっている。また、諏訪神社は、もともとは彼の家の氏神であったともいう。諏訪神社の神職は、代々沼沢家が務めており、伊勢と先祖を同じくするともいう。

現在の諏訪神社の社殿は宝暦12（1762）年に、拝殿は文化元（1804）年に建てられたものであり、いずれも江戸時代の建築物である。現在の諏訪堰は浅立集落の西側の水田を流れている。諏訪神社は、その流れを見守るように西を

向いて建っている。

## 8 妻図神社

諏訪神社から旧国道287号線を歩くと、間もなく熊野神社の鳥居が山際に建っている。その隣に石碑があった。何の碑だろうと思って眺めてみた。「妻圖神社」と彫ってあった。



初めて見る神社名である。帰ってから調べてみた。なかなか該当するものに行き当たらない。こういうときには、私はいつも荒砥高校に勤められた奥村幸雄先生の著作を紐解くことにしている。奥村先生は数学の教員であったが、若い頃から民俗学や郷土史に興味を持たれて、社会クラブの顧問をなされながら、調査や研究をなさっていた。そして、当時の社会クラブの高校生と一緒にまとめたものや、ご自分で調査、研究なさった成果を、数多くの本になさっている。

その中の1冊『祠風土記』（昭和56年5月4日 私家版）に「妻圖神社」の記載があった。

この浅立の中程に小さな祠があり、そこに男女を形取ったと思われる神像が祀られている。土地の人々はサイズ神社と呼んでいる。サイズ神をどう書きあらわすかについては、私たちの先祖はだいぶ苦労したと見え、様々な字が当てられている。才神・塞神・斉神・妻神・性神など多種多様である。浅立ではどの字を当てているのだろうか。祠の中にある修復時の棟札を見ると、妻図神と書いてあつ

た。図は津で置き換えると妻ノ神となり、塞ノ神や才の神と同じものであることが分かる。

塞ノ神・才の神などと書きあらわされる神は、道祖神・道陸（どうろく）神と呼ばれるものと同一であり、日本の原始神の一つとされている。（P37～P38）

思いがけない「道祖神」との出会いである。道祖神は長野県安曇野の象徴のような神様であり、400体の道祖神があつて、市町村の中では日本一を誇っている。しかし、白鷹町で出会うことは少ない。長野県、特に安曇野にほど近い諏訪地方とこの地区の関わりが暗示されているかもしれない。そんなことを空想してみた。

### ■ 歴史講演会を開催します。

山形新聞に長期間にわたって連載された「地名伝説」をもとに、県内各地の地名にまつわるお話を下記の要綱で伺います。

- ・日時 11月7日（土）午後1時15分から
- ・場所 「あゆむ」文化伝承室
- ・講師 新関昭男氏

申し込み、問い合わせは文化振興係船山まで

電話85-6146

### ■ 大根の話

「なんとじいさん、ずいぶん太くて、りっぱな大根とれたなー」

「ほだな。天気もまあまあだったからな。それよりもばあさん。ただ太いだけではだめだべ。なんととっても丈夫で、長持ちがいちばん。途中で折れてしまつては何にもなんね」

「ほだ、ほだ」

### ■ 黒沢温泉にて三首よめる

黒沢の川辺の宿の窓に見ゆ雄々しき蔵王は  
不動の如し

陸奥の秋は深まり姉妹らと語れば夜も短き  
ものよ

かにかくに枕ならべて寝る夜は昔を語り泣  
き笑いせり

(川)